

10. 当科で入院治療を行った歯性感染症の臨床統計的観察

口腔外科学第一講座

富岡 敬子

今回私は、1980年6月から1992年1月までの11年6ヵ月間で、入院下での治療を要した歯性感染症症例（上顎洞炎と術後性上顎嚢胞の感染例を除く）について、統計的観察を行い、その概要を報告した。

結果；全入院患者数1,000例中に占める歯性感染症症例は26例（2.6%）で、そのうち、

- 1) 男女差；なし
- 2) 好発年齢；40～50歳
- 3) 来院動機に占める紹介来院の割合；73%
- 4) 主訴；全例が腫脹もしくは疼痛
- 5) 好発部位；下顎臼歯部（55%）
- 6) 症状を自覚してから当科初診までの期間；平均6.3日

7) 初診から入院までの期間；平均1.6日

8) 入院期間；平均12.2日

9) 処置内容；切開もしくは抜歯63%

10) 抗生剤投与の有無；全例

11) 投与方法；静脈内投与92%

12) 抗生剤種類；

第1選択薬）ペニシリン45%，セフェム第2世代25%，
セフェム第1世代16%

13) 投与量；1日1グラム投与50%

14) 投与期間；4日もしくは6日

以上、14項目について報告した。

11. 上顎洞内異物迷入の7例

口腔外科学第一講座

川上 譲治

上顎洞は上顎臼歯の歯根と近接しているため、抜歯などの歯科治療時に、歯根や治療器具などを上顎洞内に迷入させる偶発症を生じることがある。このような医原性の上顎洞内異物は、外傷などその他の理由によるものに比べてかなり多いことが報告されている。医原性の中でも歯根、特に上顎第一大臼歯の迷入が最も多いとされているが、そのほか根管充填剤、歯科用切削バー、ピンセットやルートチップの先端、歯科用ファイル、レジン、印

象剤、綿球、人工歯根などが迷入した症例も報告されている。今回私たちは、1980年4月～1991年3月までの12年間に上顎洞内異物迷入の7例を経験したので、若干の考察を加えて、その概要を報告した。当科で経験した上顎洞内異物迷入では、歯根が最も多く6例に認められ、うち5例は上顎第一大臼歯であった。歯根以外の異物は、ラバードレーン、歯科用切削バーが各1例認められた。

12. Quincke浮腫が疑われた1例

口腔外科学第二講座

増崎 雅一

今回我々はQuinckeの浮腫と思われた症例に遭遇しましたのでその概要を報告した。

患者：42歳 男性。初診：H3年10月7日。主訴：右下唇、上唇から頬部にかけての腫脹。既往歴：13歳時、虫垂炎の摘出をうけた。家族歴：特記事項なし。

現病歴：平成3年10月7日の3時頃より口角部から右

頬部付近の異和感が生じ、5時頃になると右頬部の腫脹と皮膚のマヒ感が生じたため、本学保存科に受診し上下歯牙等診査されるがとくに異常なく当科依頼され来院。現症：顔貌は左右非対称性、右下唇、上唇、口角部から右頬部にかけて、び慢性の腫脹を認めた。同部に圧痛はない。顎下リンパ節に圧痛等なく、特に異常所見はない。